

村木厚子・元厚生労働省局長

いよいよ無罪へ

検察よ、どう責任を取るのか。 特捜部が恐れる「ある審査会」



9月10日、郵便不正事件で逮捕・起訴された厚生労働省元局長・村木厚子被告(54)に、いよいよ判決が下される。村木氏に「無罪」が言い渡されるのは確定的な情勢だが、ここにきて白を黒にしてきた大阪地検特捜部が、ある「審査会」の存在に戦々恐々としているというのだ。検察の「罪」に誰が「罰」を与えるのか。

村木氏の共犯として逮捕・起訴された倉沢邦夫被告(74)一審・一部無罪、検察側控訴)は本誌の取材に、こう証言している。「取り調べを担当した副検事は捜査の狙いをこう言っていました。『東京地検は小沢一郎の陸山会事件。大阪は石井一や、石井は民主党の副代表で超大物やからな。郵便法違反なんて罰金刑やからかまへんねん』」

この発言からも検察が「組織ぐるみ」で、政権交代目前だった民主党に狙いをつけていたことがうかがえる。西松建設事件で小沢氏を、郵便不正事件では石井氏を、こんな流れの中で「村木事件」は起きた。

村木氏の法廷では、出廷した証人らが大阪地検特捜部の非道な捜査手法を次々と暴露した。それは、検事たちが強引な手口で「検察ストーリー」に都合のいい供述調書を作成するというものだ。

「無罪判決」を待つばかりとなった今、ある大阪地検

幹部はこんな心配を口にした。「今回はヤバイ」、そんな声が内部からも出ている。審査会で検事失格の烙印を押されたら、こんな不名誉なことはありまへんわ」この幹部が気にかけているのは、「検察官適格審査会」だ。

資金管理団体「陸山会」の土地取引事件をめぐって、小沢氏に「起訴相当」の議決を出した「検察審査会」とよく似た名前だが、役割はまったく違う。

検察庁法第23条により定められた、検事の職務への適格性をチェックする組織で、弁護士なら懲戒制度、裁判官なら国会内に設置されている裁判官訴訟追委員会や弾劾裁判所に相当するものだ。3年に一度、すべての検察官に対して行われる定時審査のほか、法務大臣からの請求があった際の随時審査や、国民から請求があった場合、審査を開始するかどうかを決定する。

前出の大阪地検幹部はこ

大阪地裁に向かう村木厚子氏。千葉景子法相(上)はまた動かないのか。起訴当時の検事総長である樋渡利秋氏(中)、大林宏現検事総長(下)

う喚く。

「法廷でここまで、捜査のいい加減さが暴露されたことはなかった。もし、審査会に請求があれば、村木さんの無罪で世論が沸き返っていることもあり、検事の罷免もありうる」と、ひやひやしているんですわ」

昭和23(1948)年の設置以来、罷免されたのは、1992年に行方不明になった副検事一人だけ。それも、副検事が長期間失職したからというものです。審査会では、強引な捜査やでっちあげ捜査などで検事が処分されたことはないんですよ」

「確か、党の事務方から言われて委員になった。何をやるのか説明もなく「出席さえすればいい」と言われただけ。眠そうな会議だったことしか覚えていない」

者として名前を連ねている弁護士の前田明夫氏は元検事総長。ちなみに原田氏は検事総長時代、元大阪高検公安部長の三井環氏の検察裏金告発に対し、「口封じ逮捕を許した裏金隠蔽の中心人物でもある。

された厚労省の元担当係長、上村勉被告(40)の公判にも証人として出廷している。6月30日の上村被告の公判で、国井検事は、公判担当検事からこんな質問を受けている。

元大阪市助役 大平光代弁護士が語る

「無罪を確信した村木さんのあの一言」

村木厚子さんに初めてお会いしたのは2004年、私が大阪市の助役に就任した直後のことでした。

「昭和三十二年(1947)年、私が大阪市の助役に就任した直後のことでした。助役の仕事というのは、市庁舎のなかでの執務ばかりでなく、

「報道したのには1社だけで、それから説明した。東京新聞しか報じず、他メディアが報じなかったから「事実でない」というのだ。しかし、実際には、東京新聞のあと

「今度、大阪でこんな取り組みをしたから予算を認め

「生活保護というのは本当に必要な人が居なければならぬ。それが立ち直りのチャンスにならないならばならぬ」とお話ししたら、

「私は14歳のとき、割腹自殺をはかったことがあります。原因はいじめ。いたずら電話をかけた犯人だ、とぬれぎぬを着せられたことでした。いくら「私はやってない」と言っても信じてもらえなかった。村木さんも大阪地検の取り調べに、いくら「知らない」と言っても聞いてもらえなかった。それがどれだけつらいことか、私にはわかります。

国井検事は、村木氏の公判のほか、共犯として逮捕

「さいたま地検にいた際、あなたに関する事件が報じられたのを覚えてますか」



大阪市の生活保護の受給率がとても高いんですが、本当に必要な人だけでなく、不正に受給している人も多くいます。私が、

「これは何とかしなきゃいけない」とお話ししたら、

「国井さんは、私が話してもいない内容の調書をつくり、署名を迫ってきた。抗議すると「これだいいんだ」と机をたたかれた。これには、人生で初めて殺意を覚えました。検察官としての適格性を問えるものなら、ぜひ審査会に訴えたい」

「責任の所在なき役所」とよばれる検察。村木事件は、検事たちがわざわざムダに税金を使って、でっちあげたものだ。誰がこの「検察の罪」を弾劾するのか。本誌・今西憲之、大貫聡子

して懸命に改革に取り組みましたが、メディアなどからの批判の矢面に立たされた。さらに改革に反対する内部からも強い反発を受け、非常に辛い思いをしました。

「生活保護というのは本当に必要な人が居なければならぬ。それが立ち直りのチャンスにならないならばならぬ」とお話ししたら、

「私は14歳のとき、割腹自殺をはかったことがあります。原因はいじめ。いたずら電話をかけた犯人だ、とぬれぎぬを着せられたことでした。いくら「私はやってない」と言っても信じてもらえなかった。村木さんも大阪地検の取り調べに、いくら「知らない」と言っても聞いてもらえなかった。それがどれだけつらいことか、私にはわかります。

「国井さんは、私が話してもいない内容の調書をつくり、署名を迫ってきた。抗議すると「これだいいんだ」と机をたたかれた。これには、人生で初めて殺意を覚えました。検察官としての適格性を問えるものなら、ぜひ審査会に訴えたい」

「さいたま地検にいた際、あなたに関する事件が報じられたのを覚えてますか」

Advertisement for the book 'I am Innocent' by Ritsuko Muraki, published by Asahi Shimbun. The ad includes the title, author's name, and price (1600 yen + tax).